

依囑製作品一覧

品名	数量	受託年度	本年度内竣工未竣工ノ別	依囑者
仙臺廣瀬橋高欄	壹式	前年度	竣工	宮城縣
紀念文字	拾五字	同	同	毛利公爵
銀製花盛器	壹個	本年度	同	桂侯爵
純金製コップ附屬品一式	壹組	同	同	在韓國統監府員 鈴木穆
三ッ組金盃	壹組	同	同	日本勸業銀行
日英博覽會賣店館入口裝飾用造花及仁王立像二体	壹式	同	同	日英博覽會事務局
梵鐘	壹個	同	未竣工	隆國寺住職 細川祖良
台徳院靈屋模型	壹個	同	竣工	東京市
東京市摸型	壹個	同	同	同

『東京美術學校校友會月報』記事抜粹

東京美術學校近事〔七—六〕^{巻号} M・四二・二・二八^{年月日}

○教授諸氏の陞等 教授大築千里、白山福松、寺崎廣業の三氏は、一月二十六日付を以て各高等官五等に陞叙せらる。

○職員の出張 石井〔吉次郎〕助教は舊臘十二月末より本年一月へかけ、靜岡縣の依囑により同縣下久能山へ、修繕工事監督のために出張滞在せられ、櫻岡〔三四郎〕教授は一月廿七日より五日間、本校本務にて宮城縣仙臺市へ出張せられたり。

○雇員の任命 磯野富之助氏（圖案撰科卒業）は、一月三十一日付にて本校雇を命ぜられ、文庫掛申付けられたり。

○豫備科師範科志願者の出願期日 本校に於テ來四月初めより入學を許すべき、豫備科並に圖畫師範科生徒は、先頃來募集中なるが、其願書提出期日は、各三月一日より同月十三日迄にして、右募集に關する詳細の心得等は、十二月十四日の官報廣告には圖畫師範科の分を、同月十五日の官報廣告には豫備科の分を載せたり。關係ある向は參看せらるべし。

東京美術學校近事〔七—七〕 M・四二・三・二七

○白濱教授の出張 文部省視學委員なる本校教授白濱徵氏は、二月十九日より二週間、學事視察のため同省より大阪府下へ出張を命ぜられたり。

○古宇田〔実〕教授の復職 同教授は三月一日付を以て復職を命ぜられたり。

○卒業式と展覽會 本校第十八回卒業證書授與式は三月二十七日午前十時より會議室にて舉行せらるることとなり、引續て同三十日まで三日間、成績品展覽會を催すこととなれり。されば卒業式當日の招待者には式の前後に於て展覽會陳列品を觀覽に供し、同日午後

本校より展覽會に招待したる人へのみ入場を許し、廿八日より三十日迄は、入場券を所有する一般の人々に縦覽せしむるの定めなりといふ。

東京美術學校近事〔七—八。M・四二・四・二七〕

○第十八回卒業證書授與式 第十八回の本校卒業式は、如豫定三月二十七日（土曜）を以て構内會議室にて行はれたり。午前十時號鐘と共に、來賓、職員、卒業生一同式場に參集し、正木〔直彦〕學校長は先づ式辭として、今回の卒業生に關すること、並に校舎の新築等につきて一場の演説をなし、尋で卒業生に順次證書を授與し、次に在學中の精勤者に精勤賞狀を付與し、卒業生に對する正木學校長の訓諭あり。了りて小松原〔英太郎〕文部大臣の祝詞あり、また卒業生總代の西洋畫科金山平三氏の答辭ありて式を終へ、一同に茶菓を饗して各自思ひ／＼に退散せり。當日の來賓は小松原文部大臣、濱尾〔新〕東京帝國大學總長、松井〔直吉〕農科大學長、高松〔豊吉〕工學博士の諸氏をはじめとし、藝術家、新聞記者、卒業生の父兄、前卒業生にして、式の前後に於て、午後より開かるべき成績品展覽會を縦覽せしめられたり。その文部大臣の祝詞、卒業生の姓名及展覽會の出陳作品等は左の如し。

小松原文部大臣祝詞

美術は國家文明の精華にして、之を發揚するは實に美術家の任務なりとす。況や社會の風紀に直接の關係あること甚緊切なるものあるをや、本校卒業生諸子の責任重うして且大なりとす。

製作品は亦實に作家其の人の人格の反映なり。故に諸子の人格は直ちに其の作品に影響し、作品の妍媸は觀者の心に感應して、或は人をして鄙陋ならしめ、或は人をして高尚ならしむ。畢竟作品は作者胸底の氣韻が、其の指頭より迸りて、跡を絹素金石の上に留めたるものに過ぎず。諸子夫れ畢生の力を盡して、藝術の奧妙を極むると共に、常に人格の修養に潛心して、善く完全の作品を出し、明治文明の精華を發揮して、以て昭代の美術家たる本分に背かざらんことを期せよ。茲に卒業證書授與の式に臨みて、一言諸子の前途を祝し、併せて希望する所を告ぐ。

明治四十二年三月二十七日

文部大臣小松原英太郎

卒業生姓名及卒業製作

日本畫科

高藤大納言	本科	野原	安	司
化 銀 杏	同	香川	敬	事
秋の彩り	同	竹田	豊	太郎
神 光	同	増田	久	太郎
菊池武光	同	甲斐	英	雄
秋景山水	同	生野	恆	太郎
拈華微笑	同	大越		直
西 洋 畫 科				
自畫肖像、秋の庭		金山	平	三
漁夫、大原女				
自畫肖像、憐白頭	同	渡邊		軛

自畫肖像、失業者	同	有田	四郎
自畫肖像、煖爐	同	紺野	三郎
自畫肖像、僕の友達	同	山本	兵三
自畫肖像、畫室の人	同	宮崎	秀勇
自畫肖像	同	久米	福衛
自畫肖像	同	中村	元麿
自畫肖像、愛	同	麻生	茂
自畫肖像	同	眞田	久吉
自畫肖像	同	小林	徳三郎
自畫肖像	同	鹿毛	屋藏
自畫肖像	同	菊池	香三
自畫肖像	同	上田	貞次
自畫肖像	同	溝淵	盛美
自畫肖像、ゆく春	撰科	安藤	東一郎
自畫肖像	同	小倉	三郎
彫刻科			
かほり	本科	朝蔭	圓治郎
江戸の花	撰科	近藤	三四
圖按科			
各種工藝圖按 資料十二ヶ月	本科	加藤	卓爾
畫家住宅設計圖按	同	寺尾	熙一
婦人用服装圖按	同	廣瀬	尋常
音樂家在宅設計圖按	同	富本	憲吉

婦人用服装圖按 同 酒卷 貞吉
 染織及器具圖按 同 番匠 勇作

金工科
 牡丹圖額 本科 神谷 甚一郎
 龍圖額 撰科 堀井 董

鑄造科
 不動尊 本科 山本 貞治
 鍾 旭 同 津田 良次郎

漆工科
 羅 漢 撰科 小野 直平

漆工科
 双去双來圖蒔繪額面 本科 高中 文助
 鯉圖蒔繪硯筥 同 磯矢 隆之

精勤證書受領者
 漆工科 本科 高中 文助

日本畫本科
 同 同 石川 巖
 同 撰科 宮坂 春章

○延期者卒業 卒業製作延期の左の三氏は去る三月三十一日、卒業證書を授與せられたり。

○成績品展覽會 同會は卒業式當日の廿七日午後には、本校招待者に觀覽せしめ、廿八日より三十日迄の三日間は、入場券を所持せる一般人士に縱覽せしめたり。各科の配置順序は、圖按科、漆工科、彫刻科、日本畫科、金工科、西洋畫科、鑄造科、師範科にして、各その成績品を陳列し、參考品等をも交へたるもあり。今回は一般に

作品を賣約せず、又繪端書若くは紀念品等の即賣をも許されざりしを以て、觀覽者中には多少失望したるもありしといふ。

入場人員は總計五千八百四十九人にして、之を細別すれば左の如し。

三月廿七日(晴、土曜) 二五〇人

同 廿八日(晴、日曜) 二、一〇三人

同 廿九日(雨、月曜) 一、〇六五人

同 三十日(晴、火曜) 二、四三一人

○本校の新入學生 本年四月より入學を許すべき豫備科及圖畫師範科入學志願者の撰抜試験は、四月一日より施行せられたるが、本校豫定の募集人員に超過したるは、西洋畫科、圖案科、漆工科の志願者にして、夫々試験を施し、結局左の如く入學を許可せられたり。

豫備科入學者

日本畫科志願(十四人)

中村健之助 伊知地 廉 寺門 祐之

山邊 重平 小栗 武郎 川端喜代吉

立野 甚一 石川 廣助 五十嵐藤次郎

山根 泉介 齋藤敬一郎 得重常太郎

三宮 恒 田邊 讓

西洋畫科志願(卅人)

柿崎 清助 野木定次郎 福田 靖夫

畠山 秋夫 前田 慶藏 森脇 忠

長崎 了惠 遠山 五郎 後藤 博

淺井 政藏 石井 綱治 仁保 寛正

小林 克巳(マヤ) 伊藤 鼎 近藤 芳男

服部 亮英 梶原 貫五 原 詔光

高橋 篤雄 久保 篤敬 川島 顯正

森島 直造 田中時次郎 平田 宗胤

鍋井 克之 高間 惣七 六角 集二

山田 實 岡見 富雄 宇野 長尙

彫刻科塑造部志願(三人)

齋藤太吉郎 河村 弘 横田 貞信

同 科木彫部志願(三人)

林 健市 野田長次郎 岡崎 朋邦

同 科牙彫部志願(一人)

川島 鼎三

圖案科志願(十人)

專頭憲太郎 木村得三郎 松本 末男

藤川 直造 藤村彦四郎 田川 三郎

藤岡 茂男 安藤喜八郎 吉田 智康

伊藤 豐

金工科志願(三人)

加藤 幸三 森川 瑛 大森 俊治

鑄造科志願(三人)

高村 豐周 伊藤 祐治 柳 俊夫

漆工科志願(八人)

牧 千里 石崎 誠二 河野 順一

山名 英一 本田 重盛 蓮花 宗二

宮川 盛 五十嵐三次

圖書師範科(廿五人)

霜田 利平 増尾 精一 大河内定雄
 曾根末次郎 中本敏太郎 海老原 茂
 末 廣長 松原 茂 西岡 瑞穂
 花曲 義平 佐藤謙太郎 市川 邦彦
 荒川 潔 小堀 章 小塚義一郎
 權藤 種男 福嶋 章 小野久壽馬
 幕谷 四郎 鹽月 善吉 眞鍋 蕃
 高瀬猪一郎 松崎巍七郎 志賀 寛治
 志賀九十郎

入學を許可せられたるものは以上の如くなるが、今茲に昨年との比較人員を記せば左の如し。

科名	昨年の 應募者	同入學 許可者	本年の 應募者	同入學 許可者
日本畫	二四	二四	一三	一四
西洋畫	九一	三一	九五	三〇
彫刻	一三	一三	八	七
圖案	二二	一二	一七	一〇
金工	四	三	三	三
鑄造	三	三	三	三
漆工	四	四	一三	八
師範	二五	二〇	四六	二五
計	一八六	一一〇	一九八	一〇〇

東京美術學校近事〔七一九。M・四二・五・二七〕

○東京美術工藝展覽會審査員 去る四月十四日、本校教授、高村〔光雲〕、石川〔光明〕、竹内〔久一〕、海野〔勝珉〕、海野〔美盛〕、大築〔千里〕、白山〔福松〕、和田〔英作〕、島田〔佳矣〕、櫻岡〔三四郎〕の十氏へ、東京府より東京美術工藝展覽會審査員を囑託せられたり。

○日英博覽會評議員 本校長正木直彦氏は四月十九日、日英博覽會評議員仰付けられたり。

○教授諸氏の敍位と陞等 教授大築千里、白山福松、寺崎廣業の三氏は、四月廿日各從六位に陞敍せられ、古宇田〔実〕教授は四月三十日、高等官五等に陞等せらる。

○新築教室の落成 本校々舎中、先年來新築しつゝありし、圖案、金工、鑄造、漆工諸科の教室に充つべき一棟と、工藝化學教室に充つべき一棟とは、此程漸く新築落成したるを以て、近日中にはそれ／＼移轉の運びに至るべし。

○高村教授の出張 同教授は古社寺保存の用務にて内務省より出張を命ぜられ、四月十九日、滋賀奈良兩縣下へ向ひ出發せらる。

東京美術學校近事〔七二〇。M・四二・七・一五〕

○日英博覽會關係の委員囑託 學校長正木直彦氏は、日英博覽會より五月六日を以て、美術及歴史に關する出品計畫委員長を、文部省より六月一日を以て、同省出品計畫審査委員を囑託せられ、教授大村

西崖氏は、五月十四日を以て日英博覽會より美術及歴史に關する出品計畫委員を、囑託岡田信一郎氏は、五月廿九日同會より建築物内裝飾及陳列箱陳列臺に關する計畫委員を囑託せられたり。

○雇員の拜命 本校本年の西洋畫科卒業生鹿毛屋藏氏は、五月十五日本校雇を命ぜられ、工藝化學助手を申付けられたり。

○職員の出張 教授小堀鞆音、助教授松岡輝夫、囑託關係之助の三氏は、何れも、學術研究のため、京都府へ出張を命ぜられ、五月中旬出張せられたり。

○生徒の受賞 五月十六日に開かれたる日本圖案會研究會の窓掛懸賞圖案審査の結果、圖案科三年の高橋昇太郎氏は、三等賞（藤に燕の圖）を、同科第二年の信田了平氏は五等賞（萩の圖）を得たりと。

○延期者卒業 本年三月卒業試験の際、病氣又は事故のため、試験を延期せられたる左の五氏は、六月十八日各卒業證書を授與せられたり。

日本畫科 石川縣土族 室野 琢磨

同 茨城縣土族 朝倉 五郎

圖案科 東京府土族 日吉 守

漆工科 静岡縣平民 豊島 銳郎

同 香川縣平民 龜山喜太郎

○圖案科と工藝科の移轉 曾て新築中なりし本校校舍の一部なる化學教室は、先頃來新築の方に移轉し、略々教具配置等の整頓を了りたるが、圖案、金工、鑄造、漆工諸料の教室に充つる建物も、今回落成したるを以て、六月廿八日より、以上の諸料は各その校舍に移

轉する筈なれば、來九月の學年始よりは、新築校舍にて授業を開始すべし。

東京美術學校近事〔八一—。M・四二・九・三〇〕

○古宇田〔実〕教授の敍位 古宇田教授は、七月十日從六位に敍せられたり。

○古社寺保存會委員 竹内〔久一〕教授は七月廿七日同委員を仰せ付けられたり。

○金工科作業方法の改正 從來金工科にては本邦在來の作業の如く疊の上に坐して作業しつゝありしが、斯くては健康上にも面白からざれば、之を他の科の如く机腰掛にて作業する様になさんとは、數年來計畫する所なりしが、今回新築校舍に移轉するを機として、いよ／＼之を實施することとなり、此程机の新調を終りたり。

○四年生の修學旅行 例年は九月に入りて施行せしが、旅行後研究上の便利等もあらんかとて、今年は去七月一日より、關〔保之助〕、羽田〔禎之進〕、石田〔英一〕の三教員指導の下に於て、先づ例によりて奈良を巡覽し、芳野〔善〕に赴き、それより京都に入り、滋賀縣を経て、同月二十一日解散歸京したり。

○美學囑託 今般文學士瀧精一氏に、本校に於ける美學講師を囑託し、本學年より開講せり。

○本學年の特待生 學業品行特に優等なる廉によりて、本學年の特待生に選定せられたる諸氏は左の如し。

今尾十一郎（日一） 土橋 三郎（日三）

吉田 清二(日四) 丹羽 賢(日四)
 神津 港人(西二) 大野 隆徳(西三)
 田邊 至(西四) 田中 良(西四)
 加藤 静児(西四) 堀 義二(彫一)
 田邊 孝次(彫一) 加藤 孝三(彫二)
 廣川松五郎(圖一) 神矢 教親(金二)
 北原 千祿(金三) 香川源四郎(漆二)
 山本 菊一(鑄二) 三木 榮(漆四)

(日二)とあるは、日本畫科一年を示す。以下之れに依ふ。

○前學年の精勤者 前學年中學業精勵の廉を以て一學年間の精勤實
 狀を附與せられたる諸氏左の如し。

平澤文吉(西一) △酒井榮之(西一) △樋渡留太郎(西一) △杉
 江春男(西二) △諸澤虎雄(西三) △加藤静児(西四) △田中 良
 (同) △三隅禎三郎(同) △河野繁市(西四) △谷本清太郎(彫
 一) △島庄吉(彫一) △中谷宏運(彫一) △志摩鶴二(彫撰一) △
 佐瀬芳之助(彫撰一) △新田藤太郎(彫二) △富永光一(彫撰二)
 △鶴崎乙也(彫三) △鹽澤角之助(彫撰三) △廣川松五郎(圖一)
 △飯田徳三郎(圖四) △能守安太郎(金撰一) △神矢教親(金二)
 △田中賑吉(金二) △酒卷洵(漆一) △溝淵好三郎(漆撰一)
 ○職員諸氏の近況 白山「福松」教授は夏季休業中伊豆修善寺へ旅
 行せらる△寺崎「広業」教授は信州の飯田へ八月十一日より滞在、
 得意の健筆を揮はる△上原「六四郎」囑託は七月廿六日出發、宮崎
 縣宮崎郡教育會主催の講習會へ出張され八月十一日より京都に滞
 在、九月初旬歸京せらる△木村「敷秀」囑託は七月廿五日より三週

間石川縣金澤地方へ旅行せらる△羽田助教は八月八日より千葉縣
 九十九里濱へ旅行せらる△久米「桂一郎」教授は日英博覽會用務を
 帶び、奥羽地方へ出張せらる△正木「直彦」校長は八月八日より一
 週間静岡縣沼津に靜浦へ旅行せらる△小堀「鞆音」教授松岡「映
 丘」助教は八月八日より凡二週間相携へて奈良及嚴島方面へ旅行
 せられ、種々研究せられしと△菅野「真」助教は八月十日より二
 週間千葉縣下へ△福井「信之進」教授は七月廿六日より二週間山形
 市へ旅行せられたるが、歸京後幾もなく三州豊橋地方へ赴かれ歸途
 遠州濱名湖の景勝を探り、箱根を跋涉して歸京せられたり△鹿毛
 「屋藏」助手は郷里筑後に歸省せられ、それより鹿兒島を經、九州
 を巡遊して八月七日歸京せられ、復び近縣へ旅行せられたり△乙竹
 「岩造」講師は八月八日より一週間京都へ旅行せらる△小場「恒
 吉」助手は七月中旬、藤原時代の建物にて鳳凰堂に類似せりといふ
 大分縣富貴寺に赴きて七月三十日迄建築裝飾等を研究せられ歸途奈
 良に立寄りて歸京せらる△島田「佳矣」教授は圖案講習のため、七
 月上旬より休暇中、秋田山形兩縣下へ出張せらるゝ昨年(の如し)△柴
 「一雄」助教は休暇中和歌山市へ旅行せらる△八卷「於菟三」助
 手は七月三日より山梨縣へ歸省せられたり△白濱「徵」教授は講習
 のため、夏期休業中京都府伏見町、大阪市、埼玉縣浦和、岡山市、
 長崎縣平戸町等へ出張せらる△岡田助教(秋嶺氏)は急性リウマ
 チスに罹り箱根温泉へ入浴せられしが九月五日快癒歸京せられたり
 △川端「玉章」教授は遠州川崎町某氏の招きによりて八月中旬同地
 へ赴かれ、得意の健筆を揮はる△赤間「運藏」助手は九月一日より
 五週間、勤務演習のため召集せられ、赤阪の近衛歩兵第三聯隊へ入

營せらる△岡田〔信一郎〕教授は澁谷の自邸にありて頻りに製作に従事せられたり、其作品は何れ公表の機あることなるべし△小堀〔鞆音〕教授は内務省の依頼にて、日英博覽會に出陳さるべき本邦古代の神事農業の圖を揮毫する筈にして、其圖は大嘗會を中央とし、嚴島神社の舞樂と春日神社の御田祭を左右となすものにて、各豎三尺横四尺なりと△和田〔英作〕教授は八月上旬より足尾日光方面に赴かれ暫く淹留せられたりと、夥多の材料を蒐集せられしなるべし。

東京美術學校近事〔八一三。M・四二・十一・三〇〕

○櫻岡〔三四郎〕教授の出張 同教授は依頼製作事業に關し宮城縣へ出張を命ぜられ、十一月二日出發せらる。
○卒業生の海外實業練習生 本年九月調べの農商務省海外實業練習生の中、本校卒業生は左の如くなりといふ。

國名	練習科目	氏名
英國倫敦	圖案	白瀧幾之助
同	瓦斯器具	田中 後治
佛國巴里	鑄金術	前島 交吉
同	木材彫刻	畑 正吉
同	彫刻應用	藤川 勇造
獨國伯林	石膏製作	山本久次郎
伊太利	圖案及彫刻	寺崎 武男
米國紐育	金屬彫刻及工業圖案	田雜 五郎

同 玩具製作 松田 鹿三
同 意匠圖案 古田土貞治
同 鑄金術 鈴木 清
○正木〔直彦〕學校長の出張 正木校長には、日英博覽會の用務を帯び、十一月十三日より十日間の見込にて、愛知、静岡、滋賀、京都、大阪、奈良の二府四縣下へ出張せられたり。

東京美術學校近事〔八一四。M・四二・十二・二七〕

○日英博覽會渡英者 日英博覽會につきて渡英せらるゝは、本校職員にては、正木〔直彦〕校長を始めとして、久米〔桂一郎〕、菅野〔真〕、關〔保之助〕の四氏なるが、正木校長は、農商務省よりにて二月の初めに、菅野關の兩氏は來年一月の五日に、久米氏は、來年の三月頃に、何れも出發せらるべしといふ。

○鑑査官の任命 正木校長、岩村〔透〕教授の兩氏は、十一月二十六日、日英博覽會評議員を命ぜられたり。
○正木校長岩村教授の出張 兩氏は日英博覽會出品鑑査の用務を帯び、十二月七日京都へ出張せられたり。

○本校の秋季旅行 秋期旅行は十一月十四日より四日間を以て施行せられたり。場所は静岡縣下にして、東海の名區と謳はるゝ奥津の附近なりき。先づ此旅行に加はれる一團二百名は、十四日午後十一時に新橋を發し、翌朝静岡に著し、各自の志すまにまに淺間神社及舊城内其他を巡覽し、歩を移して久能山東照宮に詣で、曲折の石磴に喘ぎ、建築寶物等を見、海岸を迂回して龍華寺に至り、此邊より

近く右に三保の松原を望み、天羽衣を想起し、左に奥津の清見寺を眺め、遠くは田子の浦邊の白波の美しきと、八朶の芙蓉峰の秀靈とを賞し、三保の松原に遊びて清水港に宿し、翌日は江尻奥津を経て清見寺に到り、蒲原を過ぎて岩淵に宿り、歩いて原に向ひて左富士の奇勝を探るもあり、瀛車に搭じて坐ら風光の明媚を愛づるもありて、人さまざまに旅行を了りて、十七日午後八時十分新橋著にて歸京したり。

関連事項

① 京都市立絵画専門学校設立

明治四十二年一月、京都市立美術工芸学校評議会は絵画専門学校設立を文部大臣に申請し、その結果、同年四月、京都市立絵画専門学校が設立された。当初、生徒数は一五〇名、修業年限は予科が二年、本科が三年、研究科が二年で美術工芸学校（吉田町）の校舎の一部を仮校舎として授業を開始した。はじめは大野盛郎が校長事務取扱をつとめ、四十三年三月より松本亦太郎が校長（美術工芸学校長兼任）に就任。竹内栖鳳、菊地芳文、谷口香嶠、山元春拳、西山翠嶂、合田一峰、徳田隣斎、菊地契月、庄田鶴友、辻華春らが実習の指導にあたり、中井宗太郎は美術史を、池辺義象は国文学を、江馬務は風俗史を教えた。明治四十四年三月には入江波光、小野竹喬、榊原雨村、榊原紫蜂、土田麦僊、星野空外、松宮芳年、村上華岳ら八名が卒業する（野長瀬晩花は中退）。

② 「生徒心得」改正

明治四十二年四月、「生徒心得」（第一条、第二十一条）に次の二ヶ条が付け加えられた。

第廿二 生徒ニシテ本校内ニ公告貼札等ヲ爲サントスルトキハ豫メ本校ノ許可ヲ得テ後チ指定ノ場所ニ限リ之ヲ揭示スルコトヲ得
第廿三 家族若クハ同居人中又ハ住所ノ近傍ニ於テ激症傳染病ニ罹リタルモノアルトキハ速ニ其旨ヲ本校ニ届出ツヘシ

（『東京美術学校一覽』從明治四十三年至明治四十四年）

③ 福地復一（天香）死去

『東京美術学校校友会月報』第八卷第一号の「芸苑彙報」に次のように記された。

○福地復一氏逝く 圖案家として斯界に功勞ありし福地復一氏は、昨年来胃癌を患ひ、大學病院に入りて療養中なりしが、醫藥効なく「明治四十二年」七月廿二日午前三時芝高輪北町の自宅にて逝去せり。氏は伊勢國宇治山田の人にして、同縣師範學校卒業後、上京して三田芝英語學校に入り、明治二十二年伊勢神苑會の依囑にて、初めて歴史博物館の設計に従事したるを圖案界に身を投ずるの動機として、其後博物館、東京美術學校等に奉職し、又内外博覽會、共進會等の設計及び審査に従事して、三十年の巴里博覽會の際には、審査員として同地に遊び、歸朝後は日本圖案會を設立して専ら意匠圖案界に貢獻する傍ら、美音會を起して歌舞